D'ear

交遊録

加藤 秀樹
小川 淳也

香川・高松高校の先輩と後輩。同じく霞が関への道を歩んだ後に退官したが、片や非営利独立のシンクタンクを設立して「民」の立場から行政監視をして政策提言する道を、片や「政治家」として政策立案する道を選んだ。両者とも、根底に流れるものは同じ「日本を変革したい」という熱き思い。

「人の幸せとは何かを真剣に語れる政治家になっていただきたい。そこからしか国土のあり方は語れません」という先輩の胸をお借りして、当選3カ月の新人議員がお話しをうかがい、夢を語った。

加藤 秀樹 ◎ かとう ひでき
構想日本（Japan Initiative）・代表
1950年生まれ。大蔵省で、証券局、主税局、国際金融局、財政金融研究所などに勤務後、97年4月、日本に真に必要な政策を「民」の立場から立案・提言、実現するため、非営利独立のシンクタンク「構想日本」を設立。省庁設置法改正を皮切りに、道路公団民営化、国・自治体の事業見直し、教育行政改革など、縦横無尽の射程から日本の変革を目指す。全国で選挙の際の公開討論会を進めるNPOリンカーンフォーラムの代表、慶應義塾大学総合政策学部教授を兼務。

地域の〝宝物〟を発掘して、世界に発信しよう

新しい価値の創出は民主党から

小川 淳也 ◎ おがわ じゅんや
衆議院／比例四国（香川県１区）／１期
1971年香川県高松市生まれ。94年 東京大学法学部卒業後、自治省入省。沖縄県庁、金融庁、自治体国際化協会ロンドン事務所、総務省大臣官房秘書課を経て、03年11月 衆議院選挙に立候補するが惜敗、05年9月 衆議院初当選。

選挙という通過儀礼が日本を変える

小川　大蔵官僚から、民の立場で政策立案・提言される立場に転じられました。

加藤　行政の中にいると、形の上では権限やある種の権力を持って日本の仕組みを作ったり変えたりできる。でも一方で、いわゆる「縦割り」制度のタガや、「前例」「利害関係」というシガラミにがんじ絡めになって、一人や二人の力ではどうにもならない。そこをなんとかしたいという思いが強くなったのが基本にあります。

小川　私もその一人ですが、官から転じると言う意味では、政治家を目指すという選択肢もありますよね。

加藤　政治家という仕事は効率が悪い（笑）。選挙選挙で政策どころじゃないというのが日本の政治の悲劇。政治家になるのが目的の人は別だが、何かをしようとする人にはフラストレーションが大き過ぎる。だったら他のやり方で、と考えた。

小川　で、シンクタンク「構想日本」立ち上げを？

加藤　そう、霞が関が正規軍なら、ゲリラとして刺激を加え、隙あらばやりたいことを実現しようとね（笑）。

小川　私は「幸運にも」最初の選挙で落選しました。2年の落選中に、政治家はたとえワンタッチでも人とつながって不特定多数の方の思いを預り、選挙というプロセスを通じてでき上がる共有物を抱えた上で、決断・判断すべきだという感覚が育ちました。最近は「香川のことより日本を頼む」という支援者が増えたと感じています。有権者が変われば政治家は変わる。選挙という通過儀礼を経て変わるわけで、ある段階から、自分の中で選挙が神聖なものになりました。

加藤　その姿勢はいいですね。選挙で当選を繰り返すうち、政治家がある種の「オーラ」を身につけていくのは何十万と言う票を背負うからです。紙一重で「垢」にもなるから気をつけてください。

小泉構造改革の 功と罪

小川　小泉総理の登場には功罪両方あると思いますが、日本政治史上における意義をどう捉えられますか？

加藤　私は、小泉総理を「人斬り半次郎」と言ってきたけど、功績は党内秩序をズタズタに切ったこと。罪は、理念とか国益、国民の幸せには関心もなく、考えようともしないこと。

小川　単純さゆえの危険を感じますね。

加藤　危ういのは、国民が彼の潔さにだけに反応していること。1年前は圧倒的に反対が多かった靖国参拝が、選挙直後は賛否拮抗した数字になった。我々国民は、賢さと危うさを併せもっているという認識が必要です。

小川　過渡期の権力なんでしょうね。キャッチオールだった自民党の内部で、旧田中派以来続いた利権と支配の構造から、一種の政権交代を起こした、その功績だけは大でしょうから。

加藤　小泉構造改革の表面的な問題点は、言っていることと、やっていることが違うこと。例えば道路公団改革は、民営化という名の下の国営化。郵政改革も、株を買い戻せば国が支配できる。意味のある改革かどうかさえ今は分からない。

小川　でも表面的な問題は10年もたてば露見するし、やり直しもききます。本質的な問題は……。

加藤　国民の幸せや国益を考えていないこと。ビジョンのないその小泉さんの周りで、同様に理念のない経済学者やジャーナリズムが、すべてを目の前の経済効率・競争力ではかり、その強化のための政策を進めようとしている。短期的な視点のみで効率の悪いところを切り捨て続けたら、相対的に大きくて強い東京と大企業しか残りません。これでは日本全体としてはダメになるし、国民は幸せにならない。全国の地域それぞれに元気な会社と生き生きとした暮らしがないとけない。こんなことをこれ以上続けると、リカバー不能になってしまう。

小川　根本的な世の中の作り方の問題が長期的に引き起こす弊害が、これから先、大きく出てきそうです。

経済効率性を脱して 新しい時代の価値を築け

小川　自民党が自由と競争の都市型政党へと生まれ変わろうとしている中、民主党はそれをよく見定めながら、どういう方向感覚を持ち足場を定めるか、丁寧な観察と本質的な理解が求められる局面に入っています。ぜひ、アドバイスを。

加藤　政府とは何かを定義しないときちんと語れないけれど、単なる「大きい政府、小さい政府」は、これからは対立軸にはなり得ません。行政、税金でやれる部分を大きくするか小さくするかというだけのことで、その選択肢ではないでしょう。民主党は、そこから脱しなければ。

小川　もともと経済効率ではかれない助け合いとか共生とかの、人間社会が知恵として持って来た価値をどう生かすか、ですよね。

加藤　そう。行政がコミュニティの面倒をすべてみたのは、この60年の話です。江戸時代まで遡れば、いまは「官」が担うとされている警察・消防・公共事業・教育なども、「民」が目明し・火消し・自普請・寺子屋などの形で、自分たちでパブリックなものを担ってきた。

小川　そこをきちんと捉え、それぞれの地域の風土の中で生かすことを考える。

加藤　たとえば長野県の栄村では、我々の試算で1m当り11万1000円かかる建設道路を、6分の1の費用で作った。費用の半分の補助金をもらっても、残り半分を村費で出す余裕はないから工夫したわけです。下條村ではなんと3400円で作ってしまった。村費から出したのは材料費だけで、自分たちで工事した結果です。自分たちで作れば安いし当事者意識が生まれて、コミュニティも成立します。その部分をもう少し体系化し、主張すべきだ。NPOを育てようなどという標語ばかりでなく、具体策とそれをまとめる理念が、民主党には必要です。

小川　税金の無駄遣いをやめるのと同じくらい未来的な発想、新しい時代の価値観ですね。

加藤　日本をなるべく小分けにして運営し、多様にしていくという視点を持つことです。地域で昔から強かったもので産業を興す。そして、そのためには様々なルール、例えば会計方式を大企業には時価主義を適用する一方、地方の中小企業には原価主義を適用するといったことも考えるべきです。

小川　求めるものが違えば、基準も違っていいわけで…。

加藤　グローバルな経済に対抗しようとすれば、ダブルスタンダードは不可欠です。

幸せの種は、生活と地域の中にある

小川　私たちの出身地・香川県が、庵治町でのセカチュー（※）の撮影に始まって、いま映画のロケ地として注目されているんですよ。

加藤　そうなの!?

小川　丸みを帯びた古きよき、温和で平穏な空気への共感や渇望があるように感じます。香川県民の文化性や視点が突出したときに、日本は大きく舵を切るのではないかという期待と誇りに足場を置いて活動していきたいと思っています。

加藤　全国会議員にそう思ってほしい。選挙区のために金や仕事を持って来る時代は終わったけれど、地元に愛着とプライドを持って、生活・産業レベルで地場の特色ある〝宝物〟を掘り起こして、世界に出していく役割を担うべきです。それが、日本全体が世界水準になるということです。

小川　私の夢は、やはり選挙で政権が変わる国にしたいということ。そして、政治家をもっと人の信頼を集める職業に作り変えたいということです。そのときにこそ、日本はよくなる。

加藤　突き詰めると、人の幸せとは一人ひとりが毎日の生活を大事に丁寧にするということに行き着くと思う。だから、そんな国づくりが必要だと思います。

小川　追い求められている方向が、人間の幸せを追求するという点ですべて一貫しています。今日はつくづく格の違いを感じました。ありがとうございました。

※セカチュー／片山恭一のベストセラー小説「世界の中心で、愛をさけぶ」

「香川県民の視点と文化性に足場を置いて日本の未来に舵を切ります」

「豊かさと幸せを創る施政は、日々の生活と地域の中に、種が見つかる」

小4から高校卒業するまでの9年間、野球部で活動。高2で受験に備えて部活をやめようと思ったき、親父に「お前に今しかできんのはみんなとの野球。それで東大に行けんかったら行かん方がええ」と言われた。続けることの意味、乗り越えたときの自分を確認する意味で、フルマラソンに過去2回チャレンジし、完走。

アイマーク
視覚障害そのほかの理由でプレス民主を活字のまま利用できない人のために、営利を目的とする場合を除き、録音・点字・拡大写本などの形で制作することを認めます。その際はプレス民主編集部へご連絡ください。